

水の有効利用

ようすいき —用悪水の開削と揚水機利用—



神楽山用水(左)と西端用悪水合流点
(安城市榎前町)



明治揚水機場 (安城市東端町)

幹線水路がつくられ、すぐ工事に着手したのが「用悪水路」と呼ばれるリサイクル水路であった。この水路は、上流の水田から集めた排水を下流の水田で再利用するシステムになっている。1881（明治14）年には、上倉（かみくら）用悪水をはじめ35路線がつくられた。このシステムは、溝口農学博士により『悪水転じて益水となる』と紹介された。

また、戦後の食糧増産時代には、末端で不足する用水を補うため、排水路や河川には揚水機を設置（48か所）した。

しかし、明治用水のパイプライン化とほ場整備事業により、用悪水路は排水専用となり、揚水機は使われなくなった。

水路用地の有効利用

— 明治用水緑道 —



西井筋緑道（知立市新地町）



安城市立安城西部小学校のせせらぎまつり
（安城市福釜町）

100年以上も脈々と碧海（へきかい）台地を血管のごとく流れていた明治用水の流れは、パイプライン化により地中に姿を消した。バルブを回せば水が出るため、水を田に引くことは便利になったが、水の姿が消えることにより明治用水への関心は薄れていった。

そこで、水路用地には、緑道や自転車道を、パイプライン沿いの公園（20か所）や学校（16校）には、「ミニ明治用水」と言われるせせらぎをつくり、現在は住民の憩いの場、学習の場、生きもの観察の場などとなっている。また、多くの人々がせせらぎの水を見ることにより、水質監視にも役立っている。